

異文化理解とコミュニケーション

澤 登 春 仁

1. 異文化への視点

昔、目の不自由な人たち数名が象の別々の部分に触れて「象は柱だ。」「いや壁のようなものだ。」「いや縄だ。」などと言い争った話はあまりにも有名であるが、これは目がちゃんと見える私達にも、当てはまる寓話である。

「人生は楽しむためにある」と考えるアメリカ人。「人生は働くためにある」と考える日本人。「変化すること」を善とするアメリカ人。「不変・定着」を好む日本人。

こうした人生観、価値観のちがいは本質的に優劣上下をつけることのできないものであるが、人は時として、自らの考え方、感じ方を唯一絶対のものとして、他の異文化を軽蔑したり、無視したりすることがある。外国語を学ぶ究極の狙いのひとつは、こうした異文化に対して、寛大な見方をし、その価値を認め、異文化を通して自らの文化を見なおすことであると思われる。異文化を構成している「ものの見方」「考え方」「価値観」と自国の文化のちがいと共通点を考察し、そのちがいを楽しむぐらいの心の余裕がほしいものである。

2. No Man is an Island

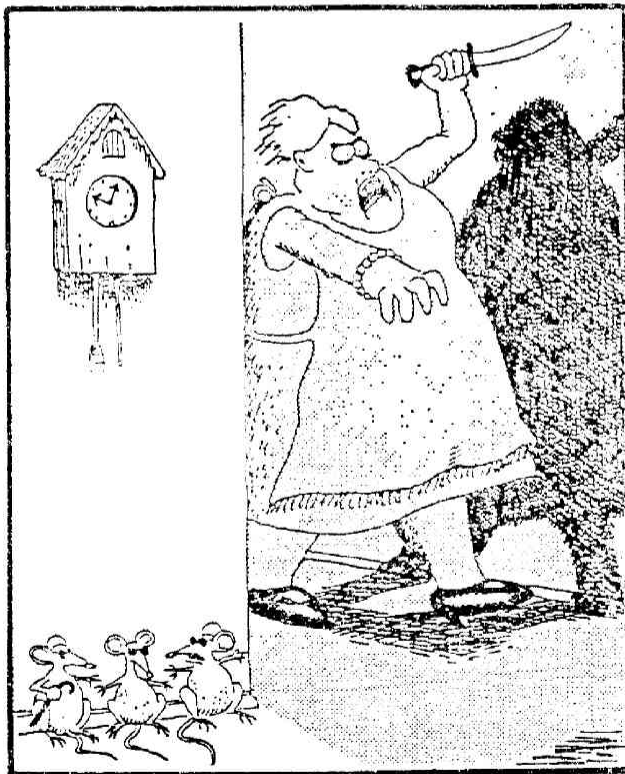
この英語の文を「人間は島ではない」と翻訳してみても、どこことなくすっきりしない。

筆者は今から十数年前滞米中にこの文をタイトルにした戦争映画を観たがこのタイトルの意味が、全くわからなかった。これがイギリスの詩人 John Donne の説教集の中の有名な語句の引用であるとわかったのは恥ずかしながらつい最近のことである。

No man is an island, entire of itself; every man is a piece of the Continent, a part of the main; if a Clod be washed away by the Sea, Europe is the less, as well as if a Manor of thy friends or thine own were; any man's death diminishes me, because I am involved in Mankind; And therefore never send to know for whom the bell tolls; It tolls for thee.

大意は「人類はすべて一体である。ひとりの人間が死ねば、人類という大陸の一角が崩れて海に沈んでしまうのと同じだ。夕暮れに鐘が鳴っても、あの鐘は誰のためかと問うなかれ。それはあなた自身のために鳴っているのだから。」ということであるが、「島」(island)は英語では「孤独」の象徴として用いられることがよくある。したがって No man is an island は「いかなる人間も離れ小島ではない——海底では人類という大陸とつながっている」ということになる。後半の 'for whom the bell tolls' は「誰のために鐘はなる」という小説の題名にもなっているが「鐘が鳴る」という

ことの implication が欧米の文化圏と日本とは、やや異なっている。ここでは同じ教区の中で人が亡くなったことを伝える「弔鐘」である。



"Egad! ... Sounds like the farmer's wife has really flipped out this time!"

図 1

3. 漫画の理解とスキーマタ

外国の漫画を見てもどこがおかしいのか、さっぱりわからないことがある。これはその国の人々なら常識として知っていることでも外国人には、耳新しい情報が背景にある場合と「何が funny か」が culture によって異なる場合があるからであろう。

図1の漫画はアメリカのGary Larson という人気作家のもの

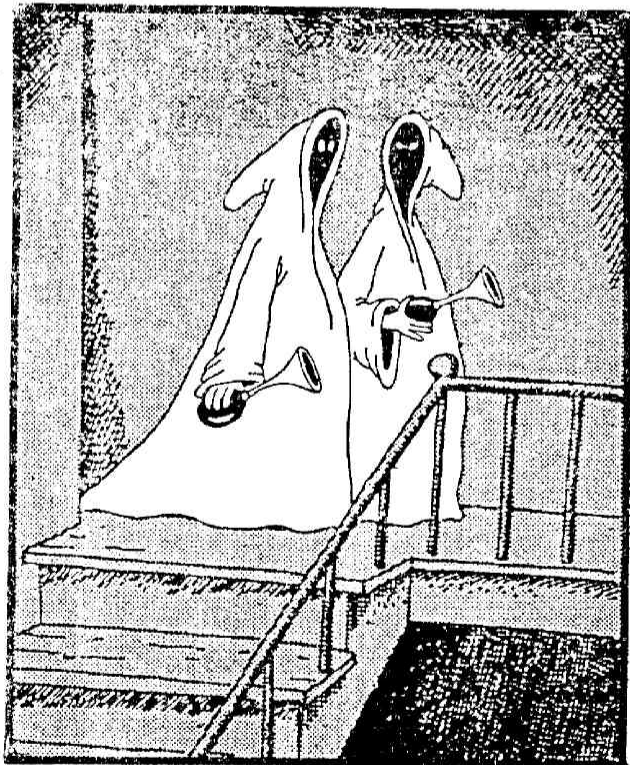
であるが図1で「おやおや，農家のおかみさん，今度は本当に気が狂ってしまったみたいね！」とひそひそ話をしているのは3匹のねずみである。この背景には英語圏の子供たちにはおなじみの Nursery rhyme がある。

Three blind mice
Three blind mice
See how thye run
See how they run
They all chased after the farmer's wife
Who cut off their tails with a carving knife
Did you ever see such fun in your life
As three blind mice

農家のおかみさんが何故あんな carving knife を振りかざしているのか？ どうしてねずみが3匹なのか？ そして何故黒眼鏡をかけた blind mice なのかがこのスキーマタによって瞬間的にわかるのである。文化を知ることによって見えないものが見えてくる。

図2は，どうやらお化けらしい二体が，手にクラクションのようなものを持ちながら「これでは駄目だ鎖がなくては」とつぶやいている。欧米のお化けは足に重い鎖を引きずりながらその音で人々をこわがらせるというスキーマタがわかると，この漫画の面白味が理解できる。

以上，「島」や「鐘が鳴るこ



"This is just not effective ... We need to get some chains."

図2

と」の意味や外国の漫画のスキーマタを例にしてきわめて断片的に異文化の理解の難しさと重要性について述べてきたが、地球がますます狭くなり異なる文化をもった人同士の接触と交流が盛んになればなるほど、こうした問題についての相互理解が重要性を増していくものと思われる。

眼を英語圏だけに向けるのではなく、広く、アフリカやアジアやヨーロッパ諸国にも向けて、global な友好の輪を拡げていくためにも、地道な比較文化研究を積み重ねていきたいものである。